

高齢者についての俗説と社会的認識に関する研究

山 戸 隆 也*

A Glimpse of the Positive Cognition about the Older People

Takaya Yamato

要約：この研究では、肯定的な高齢者についての認識が社会に根ざしていくための方法についての検討を試みた。現代社会において、高齢者についての俗説が数多く存在している。それらが高齢者についての私達の社会的認識に影響を与えているという側面があり、私達はこうした事実に関心になることが大切である。

肯定的高齢者観について考察するさいに、ひとつの切り口になりうるのが、「解放志向ソーシャルワーク」である。「解放志向ソーシャルワーク」は、人格的な自由を核とした価値観に基づいた、解放をめざすソーシャルワークであり、私達に、ソーシャルワーク実践にふさわしい認識の仕方について教えてくれるという機能を果たしうるものである。

また、ソーシャルワーカーはその実践において、俗説によって高齢者への社会的認識がゆがめられたものとなっていないか、あるいは、そのためにクライアントとしての高齢者を抑圧していないか、確認することが必要である。こうしたソーシャルワークに携わる人々の努力とともに、肯定的高齢者観を福祉教育にこれまで以上に導入していくことが肝要である。

Abstract : The purpose of this study is to list the myths about the older people, and to consider about what researchers can do against the myths. The distortions of the social recognition for the older people must be studied by social work researchers.

In this study many myths are listed by J. W. Rowe, R. L. Kahn, Greene, and some Japanese researchers. Researchers can falsify them to know the true older people. So the myths will be weakening in the societies.

As for the social work we can hope anti-discriminatory practice. Above all the social workers consider about the myths about the older people, not to distort their view. So we have to teach anti-discriminatory practice in social work education, let to know many people.

Key words : エイジング aging 「反差別的実践」 anti-discriminatory practice 俗説 myth

I はじめに

この研究では、高齢者を対象とした俗説に関

する先行研究について検討し、肯定的な高齢者についての認識が社会に根ざしていくための方法について考察することにある。高齢者が人口

*関西福祉科学大学社会福祉学部 講師

のより多くを占めるようになりつつある現代社会において、高齢者についての俗説が数多く存在している。それらが高齢者についての私達の社会的認識に影響を与えているという側面があり、私達はこうした事実に関心になることが大切である。

WHO は 1999 年を国際高齢者年と定めたが、その年に WHO が提示した『エイジング：俗説についての探求』は、その後の高齢者研究にとって一つの契機となるものと言えよう。

ここでは以下に示すような、高齢者に関する 5 つの俗説が提示されている。

- (1) ほとんどの高齢者は、発展途上国に住んでいる。
- (2) 高齢者は、皆同じである。
- (3) 男性と女性は、同じように年をとっていく。
- (4) 高齢者は、虚弱である。
- (5) 高齢者は、何も貢献することがない。

この研究報告書によると、高齢化しつつある世界を生きていくには、次の 4 点が必要となる。

- ・高齢者を価値ある資源として認識し、“エイジズム”を打破していくこと。
- ・発展する過程において、高齢者を積極的な参加者にしていくこと。
- ・高齢者への十分なヘルスケアとヘルスプロモーション。
- ・国際的な結束を促していくこと¹⁾。

本稿ではまず、高齢者についての俗説と社会的認識に関する先行研究としてジョン・ロウとロバート・カーンによる『サクセスフル・エイジング』²⁾、ソーシャルワーク研究の分野でのグリーンによる考察³⁾、アードマン・B・パルモアによるエイジズムに関する考察⁴⁾、さらに柴田博・芳賀博・古谷野亘・長田久雄の各氏による日本における草分け的な研究⁵⁾、安川悦子氏による福祉国家論を含めた分析⁶⁾などについて検討する。

さらに、高齢者に関する俗説に対して、肯定

的な高齢者についての認識が社会に根ざしているためのしくみについて、福祉教育の観点から考察する。

まず、理論面については高齢者への差別に反対する立場から解放的実践を志向するソーシャルワーク論を展開する、ニール・ソンプソンらによる「解放志向ソーシャルワーク」を確立することの必要性について指摘する。解放志向ソーシャルワークの基本的立場とは、個人と社会との相互作用を重視し、社会の抑圧、あるいは差別的価値観からの解放を目指す立場をさす。

福祉教育の方法については、わかりやすい文献・資料による肯定的高齢者観の周知の例や、筆者による社会福祉援助技術演習授業の試みなどの例をあげて、様々な形で肯定的高齢者認識を福祉教育にこれまで以上に取り入れていくことの重要性について指摘する。

研究面については、社会に広まっている俗説に対して、「俗説からの解放」のための科学的な手続きによる研究を地道に積み重ねていくことの重要性について検討する。

最後に、高齢者自身の認識という点については、V. E. フランクルによる「態度価値」の概念を援用して、「現在の状況」への意味づけについて検討する。

II 高齢者についての俗説に関する先行研究の検討

1 『サクセスフル・エイジング』と俗説

アメリカにおけるエイジング研究の分野では、ジョン・ロウとロバート・カーンが重要なパラダイムを提起しているが、彼らは『サクセスフル・エイジング』において、これまでアメリカで広く認められてきた高齢者に関する俗説について検討している。彼らが排除すべきものとしてあげている俗説の数々を、表 1 に提示しておくことにする⁷⁾。

2 グリーンによるソーシャルワーク論

ソーシャルワーク研究の分野では、グリーン

表1 『サクセスフル・エイジング』において提示された俗説

① 老いることは病むこと 高齢者はリュウマチ、高血圧、心臓病、糖尿病など慢性的な病気など、多くの病気にかかることが多い。
② 新しいことを教えることはできない 高齢者は、知能が減退するために、新しいことを覚えることができない。新しいことを訓練しても無駄である。
③ 手を施しても無駄 高齢者は、今さら健康上の努力をしても無駄である。各種の健康予防の策は高齢者にはほとんど意味がない。
④ 幸福な老いは、親次第である 病気になるのも、長生きするのも、遺伝によって決まるのであるから、様々な健康に関する努力も無駄である。
⑤ 電灯はつくが電圧は低い 高齢者は、体力・知力とも不如意に悩むようになる。また、高齢者は性的な存在ではないか、あるいは少なくとも、性に関心を持ってはいない。
⑥ 自分の役割を十分に果たさない 高齢者は生産的ではない。高齢者は生産効率が悪く、欠勤が多く、信頼がおけない。経済不況で失業者が多いときには、高齢者は排除すべき存在である。

出典：J. W. Rowe, R. L. Kahn, Successful Aging, Dell publishing, 1998 PP. 11-35 から作成。

表2 加齢に関する俗説のチェックリスト

<p>生物学的俗説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年をとるということは、肉体的な問題や病気をともなう生活を意味する。 ・高齢者は魅力がない。高齢者は臭く、歯がない。ほとんど見えたり聞こえたりせず、体重が不足している。 ・高齢者はがんばるべきではない。高齢者は心臓疾患を持つかもしれないし、転倒して骨折してしまうかもしれない。 ・高齢者はいつも寝ている。 ・性に関しては60歳で終了である。高齢者は性的な存在ではなく、性に関心がない。そして、性的な存在としての機能を果たすことができない。
<p>心理学的俗説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどの人は軌道の上に乗せられており、それを変えることはできない。 ・高齢者は比較的平穏に時を過ごす。人々は、生活のストレスが過ぎ去った後、彼らの労働の実をリラックスして楽しみ、落ち着いた時を過ごす。 ・高齢者は、心理療法に対して反応が鈍い。 ・高齢になると、老衰を避けることはできない。 ・高齢者は、もはや新しいことを学ぶことができない。知力は加齢にしたがって衰えていくものである。 ・高齢者は、日々起こってくる問題を解決することができない。
<p>社会的俗説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者は依存的で、だれかに世話をしてもらう必要がある。高齢者は依存的であるが、社会的に孤立し、家族からは無視されている。 ・高齢者は、年をとるにつれて、不可避免的に社会の表舞台から引込んでしまう。 ・高齢者は仕事をするのができないし、それを望んでもいない。貧しい高齢者は一人でいることを望み、ほとんどの時間、テレビをみて過ごす。 ・世代間のギャップは高齢者の疎外を引き起こす。

出典：Greene, Social work with the Aged and their Families, Aldine de Gruyter, 2000, P. 28

はジョン・ロウとロバート・カーンの研究を含めた様々な視点からの、高齢者に関する社会的俗説についての先行研究を検討し、これらが高齢者への社会的認識を否定的なものとしてきた面があると指摘している⁸⁾。グリーンは、シュナイダーとクロップによる研究⁹⁾をもとに、高齢者に関する俗説を、生物学的俗説、心理学的俗説、社会的俗説に分けて表にしている(表2を参照)。

こうした高齢者に関する俗説は、加齢や高齢者に対するアメリカ合衆国の社会の否定的な見方を反映している。俗説は、しばしば高齢者への差別を生成する。

3 パルモアによる『エイジズム』における考察

パルモアは『エイジズム』において、誤った固定概念が高齢者差別の温床となっていることを指摘している。彼によると「エイジズムとはある年齢集団に対する否定的もしくは肯定的偏見または差別である。」¹⁰⁾ここで「ある年齢集団に対する否定的偏見」とは、その集団に対する否定的固定観念、もしくは固定観念に基づいた

否定的な受けとめ方を意味し、「ある年齢集団に対する否定的差別」とは、その年齢集団の構成員に対する不当に否定的な扱いを指す¹¹⁾。

高齢者に対する否定的偏見を反映した主な固定観念として、パルモアは少なくとも病気、性的不能、醜さ、精神的衰え、精神病、役立たず、孤立、貧困、鬱といった9つの要素があると指摘する。

4 『間違いだらけの老人像』から

日本において、すでに柴田博・芳賀博・古谷野亘・長田久雄の各氏が1985年に出版された『間違いだらけの老人像』において、高齢者についての俗説に関する考察を展開している。

今日の老人像には大きなあやまりがあることがわかってきたが、それは老人の姿が主として病気や障害を抱えた老人をケアする人によって語られ、そこから老人の「平均像」がつくられてきたことによる¹²⁾。著者らによると「大多数の老人は、健康で、日常生活になんの不自由をも感じていないばかりか、その日常生活のさまざまな局面で、家族や地域社会に対して、無数

表3 『エイジズム』において指摘された高齢者に関する俗説

<ul style="list-style-type: none"> ・病気 高齢者は総じて病気がちであり、障害がある。 ・性的不能 大部分の高齢者はもう性行動をしなくなっている、または性的欲求がない。 ・醜さ 高齢者は醜い。 ・知能の衰え 知能、特に学習・記憶能力は中年過ぎになると(時にはそれ以前から)衰え始める。 ・精神病 高齢者の多くあるいはほとんどは「ボケ」ている。 ・役立たず 高齢者には一般に肉体的精神的疾患による障害がある。高齢者は仕事を続けることはできない。働き続けている少数の人々も能率が劣る。 ・孤立 高齢者の大半は社会的に孤立し孤独である。 ・貧困 大部分の高齢者は貧しい。 ・鬱病 重度の鬱病は若い人々より高齢者に多い。
--

出典：Erdman, B. Palmore, Agism: Negative and Positive 2nd Edition, Springer publishing Company, 1999 (鈴木研一訳)『エイジズム』明石書店 2002年 P.43-55より作成。

表4 『間違いだらけの老人像』が指摘する俗説

- ・老人は寝付くと長い。
- ・知能は老化によって著しく衰退し、老年期にはいれば誰もがボケてしまう。
- ・老人の性格特徴は、自己中心性、内向性、保守性、猜疑心、柔軟性・融通性の欠如、固執性、適応力の低下、不機嫌、愚痴っぽさ、出しゃばり、心氣的（自分の体の具合を過剰に気にする傾向）、抑うつ傾向（気分が沈みこむ傾向）、ガンコなどである。
- ・誰もが孤独な老年期をむかえなければならない。
- ・老人になれば、性にたいする興味も失せて、枯れてしまうものだ。

出典：柴田博・芳賀博・古谷野亘・長田久雄『間違いだらけの老人像』川島書店 P. 105-167 から作成。

の貢献をしている。』¹³⁾

5 福祉国家と俗説

安川悦子氏によると『『エイジング』つまり『老い』に関する『神話』が肥大化され、いま『福祉国家』の危機が叫ばれている。『エイジング』と『福祉国家』はどのような関係にあるのか。歴史的に見れば『エイジング』に対する対策は、『福祉国家』の主要な課題の一つとして成立してきた。しかし、同時にこのことが『エイジング』に関する『神話』を作り出したのである。』¹⁴⁾この「エイジング神話」について、安川悦子氏は、次に示すような3点を挙げている¹⁵⁾。

- ① 将来自分も含めて人は「寝たきり」になり、「社会の厄介もの」になって、介護の世話をうけるものである。
- ② 人口統計学的な少子・高齢化傾向が、将来の社会保障財政を圧迫し、ついには国家財政を破綻させるかもしれない。
- ③ 高齢者は弱くて、労働に適さない。エイジングは、人間の肉体的な能力を低下させる。

安川氏も指摘しているように、ボーボワールは福祉国家における高齢者の疎外的状況について、次のように述べている。「人びとは、定年退職は自由と閑暇の時であるとわれわれに語り、詩人たちは『港に到着した甘美さ』を讃えた。これらは恥知らずな虚言である。社会は大多数の老人にじつに惨めな生活水準を課すので『老いて貧しい』という表現はほとんど冗語法

(老いているということだけで貧しいことは自明の理)といえるほどである。逆に、貧窮者の大部分は老人である。閑暇は定年退職者に新しい可能性を開いてはくれない。彼がようやく強制から解放されたとき、人びとは彼からその自由を活用する手段をとりあげるのである。彼は孤独と倦怠のなかで無為に生きるべく運命づけられる、たんなる屑として。人間がその最後の十五年ないし二〇年のあいだ、もはや一個の廃品でしかないという事実は、われわれの文明の挫折をはっきりと示している。』¹⁶⁾

ボーボワールによるこうした考察は、確かに現代社会における高齢者の疎外された状況を言い当てている。しかし、高齢者についての認識の仕方としては、その貧しさや無為さを過度に強調しており、私たちに「俗説」を提供し、それを流布する機能を果たしている。

II 「俗説からの解放」への試論

1 解放志向ソーシャルワーク論の確立

社会に流布する俗説が、高齢者に関する社会的認識をゆがめ、高齢者差別を増長させているとすれば、ソーシャルワークの立場からは果たしてどのような対策を成しうるだろうか。ここでは、ソーシャルワーク理論の中でとりわけクライアントへの差別について大きく取り上げてきた、「解放志向ソーシャルワーク」の可能性について検討する。

ソーシャルワーク研究において、この「解放志向」という言葉と同じような意味を表す言葉として用いられてきたものとしては、「差別に

反対する]、「解放的」、「反抑圧的」等が挙げられるが、ここでは、アンソニー・ギデンズによる「解放」という概念についての定義を援用し、この種の立場についてのわかりやすい概念を提示するための試みとして、「解放志向ソーシャルワーク」という概念を用いている。

「解放」という言葉について、アンソニー・ギデンズは次のように定義している。「解放とは、人格的自由を、もっと正確に言えば、伝統からの自由、過去からの束縛からの自由、専制的権力からの自由、物質的貧困や欠乏状態による抑圧からの自由等々のさまざまな種類の人格的自由を意味する。」¹⁷⁾

解放志向ソーシャルワークとは、このように人格的な自由を核とした価値観に基づいた、解放をめざすソーシャルワークを指す。解放志向ソーシャルワークの基本的立場とは、個人と社会との相互作用を重視し、社会の抑圧、あるいは差別的価値観からの解放を目指す立場である。

抑圧行為の性質および文化、社会構造を通して、抑圧行為が個人によっていかに永続されているかは、数ある研究の中でも特にニール・ソンプソンによって開発され、説明されてきた¹⁸⁾。反抑圧的、解放的実践という言葉を用いて、ソンプソンは独自のソーシャルワーク論を展開する。ソンプソンによる見解は、次の言葉に凝縮されている。「高齢者差別は抑圧の一形態であるが、軽視されがちである。それは、しばしば他の抑圧にプラスされる。そして、その結果、高齢者は人間として扱われなくなる。そこには、高齢であるということを否定的なイメージで捉え、単に高齢であるということだけで高齢者の人間性を認めず、結果的に差別につながっている。」¹⁹⁾

ところで、「差別」という言葉について好井裕明氏は、次のように述べている。「差別することは、まさに文字通り、その存在を否定したり抹殺したりするような意味をこめたカテゴリーや物言いなど言葉の暴力や相互のやりとりを

忌避していく関係的な暴力、相手にダメージを与える身体的な暴力を用いて、暴力の対象となる人々を具体的に排除する営みのことだろう。」²⁰⁾

この見解を手がかりにソーシャルワークの分野における差別について検討すると、これまで挙げてきた俗説によって、ソーシャルワーカーによる社会的認識がゆがめられ、ソーシャルワーカー自身さえも、クライアントとしての高齢者を抑圧してきたという側面があったと考えられる。このような認識は、ソーシャルワーク実践において必要であり、こうした解放志向ソーシャルワークの確立が望まれる。

もちろん、解放志向ソーシャルワークに止まらず、ソーシャルワークにおける様々な立場(例えばエンパワメントやストレングズ視点を強調する立場等)からの研究、あるいはソーシャルワーク以外の専門分野からの「エイジズム」に関する研究によっても、こうした高齢者に対する俗説を打ち負かす知見が導き出されることが期待される。

「解放志向ソーシャルワーク」は、人格的な自由を核とした価値観に基づいた、解放をめざすソーシャルワークである。「解放志向ソーシャルワーク」は私達に、ソーシャルワーク実践にふさわしいものの見方について教えてくれるという機能を果たしうるものである。

また、ソーシャルワーカーはその実践において、俗説によって高齢者への社会的認識がゆがめられたものとなっていないか、あるいは、そのためにクライアントとしての高齢者を抑圧しているようなことがないか、確認することが必要である。

今後の課題としては、反抑圧的、解放的実践という言葉を用いて、独自のソーシャルワーク論を展開するソンプソンらによる研究についてさらに検討し、その確立をめざしてしていくことが大切である。

2 肯定的高齢者観と福祉教育

高齢者についての俗説の打破を意図する、科学的手続きに基づいた調査研究の積み重ねと同時に、科学的研究や現場での実践活動を積んできた研究者等が、肯定的高齢者観を提示し、広めていくことも重要である。例えば日野原重明氏による『生きかた上手』²¹⁾をはじめとする一連の著作は、高齢者のみならず、若年層にも広く読まれている一般向けの著作であり、その中で必ずしも「科学的手続きに基づく」かたちで説が提示されているわけではない。しかし、日野原氏の長年の実践・研究という裏づけによって、彼の諸説が高齢者についての社会的認識に大きな影響を与えたと考えられる。

社会に広まっている俗説からの解放を志向し、肯定的高齢者認識を広めていくことは、研究者たちが果たしうる社会的責任の一環として重要である。また、こうした取り組みの一例としては、ナーウェンとガフニーによる『闇への道 光への道』をあげることができる。「差別に向かいがちなわたしたちの心をどのように老人に癒してもらい、ひいては自らの老いをもっと身近に感じ、親しむようにしてもらえるか、ということも考えていきたい」²²⁾、「年をとることは人間が必ず通っていく大切な過程の一つであり、これを否定することは大きな過ちでしかない。自分が老いていくことを発見、あるいは再認識した人はみな、なにより幸いなことに、自分の、そして同行の仲間であるすべての人の生を豊かにすることができる」²³⁾といった彼らのケア観、高齢者観は、高齢者に関する科学的諸研究を背景とする思想を提供し、「俗説からの解放」の機能を果たしうるものである。

高齢者についての俗説を除去していくにあたってのもうひとつの方法として、福祉教育の内容に、肯定的高齢者観を取り入れていく取り組みが有効と思われる。

こうした試みのひとつとして、筆者による社会福祉士養成校における社会福祉援助技術演習の事例をあげておく。その手順は①学生に「高

齢者」という言葉から想起する言葉をたくさん書いてもらう、②それをもとに少人数グループにわかれて、言葉を書き出してみた感想、それらの言葉にはどのような傾向を見出すことができるか、その傾向についてはどのように感じるかなどについて話し合う、③その内容を学生がふりかえり用紙に記述して提出する、というものである。筆者が試みたケースでは、学生による議論の内容や、ふりかえり用紙の内容などから次のようなことがうかがわれた。

- (1) 「高齢者についてのイメージは、悪いものが多く、特に活動的でない内向的なイメージが多いのでこれを直していきたい」という学生が多かった。
- (2) 「自分が現在持っている高齢者についての先入観による悪いイメージを、そのまま相談や事例研究の場に持ち込んでしまいがちであることを反省し、高齢者についての認識を考え直す必要があると思った」という意見が学生から出た。

こうした取り組みをするさいに、「俗説」として学生が指摘したことを、さらに「科学的な目でみてそれが俗説であると言い切れるのか」、といった疑問を学生に提示し、考察する機会を与えることも大切である。

3 俗説に対する反証の提示

これまでも実施されてきているように、高齢者についての俗説の打破を意図する、科学的手続きに基づいた調査研究の積み重ねが重要である。例えば、ジョン・ロウとロバート・カーンは『サクセスフル・エイジング』の中で「老いることは病むこと」という俗説について次のように反証を提示する²⁴⁾。

アメリカでは今日、老人病とみなれているリウマチ、高血圧、心臓病などの慢性病は、統計的なデータを見ると1960年に比べて1990年には激減しており、またこの数十年間の研究の結果、高齢のアメリカ人はおおむね健康であっ

た。例えば、1994 年において 65 歳から 74 歳の高齢者のうち 89% は何の障害も持っていなかった。各種の高齢者の疾病に関する調査などを見ても、年をとるということは、病むことではないと考えられる。

ジョン・ロウとロバート・カーンはさらに、「高齢者は自分の役割を十分に果たさない」という俗説についても、ボランティアや家事労働といったアンペイドワークを、雇用され支払いを受けるペイドワークのように価値あるものとみなすことが必要であり、アンペイドワークに多く携わる高齢者が、この俗説の反証になるとみなしている²⁵⁾。このように、統計的データ、あるいは質的データによって裏付けるという方法だけではなく、科学的な認識方法を取り入れることによって、俗説に反対することができよう。

高齢者が人口のより多くを占めるようになりつつある現代社会において、高齢者についての俗説が数多く存在している。それらが高齢者についての私達の社会的認識に影響を与えているという側面があり、私達はこうした事実に関心になることが大切である。

社会に広まっている高齢者についての「俗説からの解放」に向けては、科学的手続きに基づく地道な実証的研究の積み重ねと、それらを体系化していく努力が、今後の課題として残されている。

4 「態度価値」による意味づけ

ここで、高齢者についての高齢者自身の認識についてふれておく。言うまでもなく、高齢者自身は社会を構成しているメンバーであり、その割合は今後ますます増大していくことが予想される。

高齢者についての高齢者自身の認識について考察するにあたり、V. E. フランクルがあげている 3 つの「価値」、すなわち「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」についてのアイデア²⁶⁾は、重要な要素を提供しうるものである。

自分の仕事を実現することなど、何かを成すことによって実現される「創造価値」は、高齢になると自然と成就しにくい面がある。「体験価値」とは、他者との個別的な愛の関係を通じての体験によって実現される。日常的な状況にあっては体験し得ないような感動を伴うものを指す。「態度価値」は、自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命であり、避けられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるかによって、体験についての意味づけが実現されるような価値を指す。

年老いて、かつて出来たことが出来なくなっても、他者との感動的な出会いが最早実現出来なくなったとしても、高齢者がどのような態度で自らの「現在の状況」について認識するかによって、高齢者についての社会的認識は決定的な差異をもたらすと言えよう。

III ま と め

肯定的な高齢者についての社会的認識は、図 1 のような循環を経て実現していくものとして捉えることができる。

「老年観に関連して、高齢者に対する意識も時代を超えて存在する。たとえば、老人ホームの利用について現代の姥捨山と潜在的に感じる

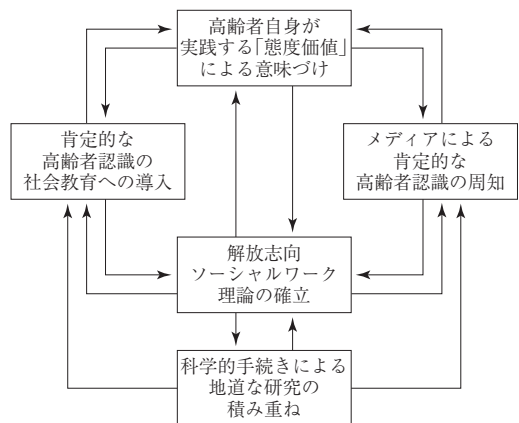


図 1 肯定的な高齢者についての社会的認識が実現していくための循環

人は少なくないし、依然として実際と相違してネガティブな老年観を持つ人も多い。』²⁷⁾そのような中で、肯定的高齢者観について考察するさいに、ひとつの切り口になりうるのが、「解放志向ソーシャルワーク」である。「解放志向ソーシャルワーク」は、人格的な自由を核とした価値観に基づいた、解放をめざすソーシャルワークであり、私達に、ソーシャルワーク実践にふさわしいもののみかたについて教えてくれるという機能を果たしうるものである。

また、ソーシャルワーカーはその実践において、俗説によって高齢者への社会的認識がゆがめられたものとなっていないか、あるいは、そのためにクライアントとしての高齢者を抑圧しているようなことがないか、確認することが必要である。こうしたソーシャルワークに携わる人々の努力とともに、肯定的高齢者観を福祉教育にこれまで以上に導入していくことが肝要である。

今後の課題としては、反抑圧的、解放的实践という言葉を用いて、独自のソーシャルワーク論を展開するソンプソンらによる研究についてさらに検討し、その確立をめざしていくこと、さらに研究者達が地道に一つ一つの俗説に対して、反証をあげていく努力を積み重ねていくことが肝要であり、さらにそこから得られた知見を社会に広めていくことが望まれる。そのことを通じて、それらの俗説は社会的な力を失っていく。

謝辞

この研究に関しては、関西福祉科学大学大学院臨床福祉学研究科に在籍中に、あるいは卒業した後も多くの先生方、現場でご活躍の方々、院生の方々から貴重なご指導、アドバイスをいただきました。お名前は挙げませんが、深く感謝の意を述べさせていただきます。また、同大学院の授業において杉本敏夫先生には、Greene (2000年)、柳井勉先生にはJ. W. Rowe, R. L. Kahn (1998年)の講読等をつうじてご指導いただきましたことは、この研究を始めたきっかけともなりました。心よ

り感謝申し上げます。

注

- 1) WHO, Ageing : Exploding the myths, Ageing and Health Programme. WHO, 1999 PP. 3-22
- 2) J. W. Rowe, R. L. Kahn, Successful Aging, Dell publishing, 1998
- 3) Greene, Social work with the Aged and their Families, Aldine de Gruyter, 2000
- 4) Erdman. B. Palmore, Agism : Negative and Positive 2nd Edition, Springer publishing Company, 1999 (鈴木研一訳)『エイジズム』明石書店 2002年
- 5) 柴田 博・芳賀 博・古谷野 亘・長田久雄『間違いだらけの老人像』川島書店 1985年
- 6) 安川悦子「イギリスにおける『エイジング』概念の成立-『老齡年金』と『リタイアメント』にみられるエイジズムとセクシズムの構造」安川悦子・竹島伸夫編著『「高齢者神話」の打破』御茶ノ水書房 2002年 P. 139-142
- 7) J. W. Rowe, R. L. Kahn, op. cit., PP. 11-34 三品武男「アメリカにおける現代エイジング『問題』」安川悦子・竹島伸夫編著『「高齢者神話」の打破』御茶ノ水書房 2002年 P. 115-138を参照。ジョン・ロウとロバート・カーンはこの著作の中で、これらの俗説について、最近の統計的データ、質的データ等を用いて反証を挙げている。
- 8) Greene, op. cit., P. 28-30
- 9) Schneider E. G and N. P. Kropf, Gerontological Social Work : Knowledge, Service Setting and special Populations, Chicago : Nelson Hall, 1992, PP. 33-55
- 10) Erdman. B. Palmore, Agism : Negative and Positive 2nd Edition, Springer publishing Company, 1999 (鈴木研一訳)『エイジズム』明石書店 2002年 P. 21
- 11) Erdman. B. Palmore, (鈴木研一訳) 前掲書 P. 21
- 12) 柴田 博・芳賀 博・古谷野 亘・長田久雄『間違いだらけの老人像』川島書店 1985年 P. 176-180を参照。
- 13) 柴田 博・芳賀 博・古谷野 亘・長田久雄、前掲書 P. 182
- 14) 安川悦子「イギリスにおける『エイジング』概念の成立-『老齡年金』と『リタイアメント』にみられるエイジズムとセクシズムの構造」安

- 川悦子・竹島伸夫編著『「高齢者神話」の打破』御茶ノ水書房 2002年 P.139
- 15) 安川悦子 前掲書 P.139-142を参照。
- 16) Simone de Beauvoir, *La Vieillesse*, Gallimard, 1970 (朝吹三吉訳)『老い』(上)人文書院 1972年 P.12
- 17) Anthony Giddens, *Beyond Left and Right*, Polity press, 1994 (松尾精文・立松隆介訳)『左派右派を超えて』而立書房 2002年 P.119-120
- 18) Joan Baraclough, Grace Dedman, Hanzel Osborn & Pyhllis Willmott 100 years of Health and Social Work 1895-1995: Then-Now Onwards, British Association of Social Workers, 1996 (児島美都子・中村永司監訳)『医療ソーシャルワークの挑戦』中央法規 1999年 P.238 なお、ソンプソンによる著作で翻訳されているものとしては『ソーシャルワークとは何か』がある。また、ソンプソンによる高齢者を対象としたソーシャルワーク研究の著作としては Thompson, *N Age and Dignity: Working with Older People*, Aldershot Arena 1995を挙げることができる。
- 19) Judith Milner and Patrick O'Byrne *Assessment in Social Work* Macmillan Press, 1998 (杉本敏夫・津田耕一監訳)『ソーシャルワークアセスメント』ミネルヴァ書房 2001年 P.72-73
- 20) 好井裕明「差別を語るということ」『社会学評論』Vol. 55, No. 3 2004年 P.315
- 21) 日野原重明『生きかた上手』ユーリーグ 2001年
- 22) H J. M. Nouwen and W J. Gaffney *Aging - The Fulfillment Life*- Doubleday 1974 (原みち子訳)『闇の道 光の道』こぐま社 1991年 P.14
- 23) H J. M. Nouwen and W J. Gaffney (原みち子訳)、前掲書 P.129
- 24) J. W. Rowe, R. L. Kahn, op. cit., PP. 11-34 P.13-18
- 25) Ibid., P33-35 無論、「高齢者の役割」という場合、「役割」にどのような定義を与えるかによって、この俗説に関する結論も多かれ少なかれ変わってしまうかもしれないが、おおむねこのアンペイドワークにも価値を置くという見解は、了解されるものと考えられよう。
- 26) V. E. Frankl *Aerztliche Seelsorge, Franz Deuticke, Wien 1952* (霜山徳爾訳)『死と愛』みすず書房 1985年 PP.32-57を参照。
- 27) 浅野 仁「老年観に関する研究—その1—近代日本短編小説にみる高齢者像—」『関西学

院大学社会学部紀要 第99号』2005年 P.111

主要引用参考文献

- J. W. Rowe, R. L. Kahn, *Successful Aging*, Dell publishing, 1998
- Greene, *Social work with the Aged and their Families*, Aldine de Gruyter, 2000
- WHO, *Ageing: Exploding the myths, Ageing and Health Programme*. WHO, 1999
- Erdman. B. Palmore, *Agism: Negative and Positive* 2nd Edition, Springer publishing Company, 1999 (鈴木研一訳)『エイジズム』明石書店 2002年
- Judith Milner and Patrick O'Byrne *Assessment in Social Work* Macmillan Press, 1998 (杉本敏夫・津田耕一監訳)『ソーシャルワークアセスメント』ミネルヴァ書房 2001年
- Joan Baraclough, Grace Dedman, Hanzel Osborn & Pyhllis Willmott 100 years of Health and Social Work 1895-1995: Then-Now Onwards, British Association of Social Workers, 1996 (児島美都子・中村永司監訳)『医療ソーシャルワークの挑戦』中央法規 1999年
- Neil Thompson, *Understanding Social Work*, Macmillan Press, 2000 (杉本敏夫訳)『ソーシャルワークとは何か』晃洋書房 2004年
- *Age and Dignity: Working with Older People*, Aldershot Arena 1995
- 浅野 仁「老年観に関する研究—その1—近代日本短編小説にみる高齢者像—」『関西学院大学社会学部紀要 第99号』2005年
- 安川悦子・竹島伸夫編著『「高齢者神話」の打破』御茶ノ水書房 2002年
- 柴田 博・芳賀 博・古谷野亘・長田久雄『間違いだらけの老人像』川島書店 1985年
- H J. M. Nouwen and W J. Gaffney *Aging - The Fulfillment Life*- Doubleday 1974 (原みち子訳)『闇の道 光の道』こぐま社 1991年
- Simone de Beauvoir, *La Vieillesse*, Gallimard, 1970 (朝吹三吉訳)『老い』(上)人文書院 1972年
- 辻 正二『高齢者ラベリングの社会学—老人差別の調査研究—』恒星者厚生閣 2000年
- 船津 衛『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣 1976年
- 日野原重明『生きかた上手』ユーリーグ 2001年
- 好井裕明「差別を語るということ」『社会学評論』Vol. 55, No. 3 2004年
- Karl Raimund Popper, *The Logic of Scientific Discov-*

山戸隆也：高齢者についての俗説と社会的認識に関する研究

- ery, London, Huthinson, 1959 (大内義一・森博訳)『科学的発見の論理』(上)・(下)恒星社厚生閣 1971年
- Anthony Giddens, *Beyond Left and Right*, Polity press, 1994 (松尾精文・立松隆介訳)『左派右派を超えて』而立書房 2002年
- Douglas H. Powell, *The Nine Myth of Aging*, Freeman and Company, 1988 (久保儀明他訳)『〈老い〉をめぐる9つの誤解』青土社 2001年
- V. E. Frankl *Aerztliche Seelsorge*, Franz Deuticke, Wien 1952 (霜山徳爾訳)『死と愛』みすず書房 1985年
- . . . *Trotzdem Ja zum Leben sagen* 2. Aufl., Franz Deuticke, Wien, 1947 (山田邦男、松田美佳訳)『それでも人生にイエスと言う』春秋社 1993年

